

平成 26 年度 【 学園研究費助成金 < A > 】 研究成果報告書

学部名 人間関係学部

刀がナ タニグチ イサオ
氏名 谷口 功

研究期間 平成 26 年度

研究課題名 長野県木祖村の「社会関係資本」と「ムラの尊厳」に関する研究

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	谷口 功	人間関係学部	准教授
研究分担者	杉藤 重信	人間関係学部	教授
研究分担者	宮下 十有	文化情報学部	准教授

1. 本研究開始の背景や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

木曾川の源流にある長野県木祖村は、本大学のキャンパスのある日進市と「友好自治体提携」を結んでおり、木曾川流域圏として農山村と都市との交流を積極的にすすめている。また、日進市の地酒「杲流」は木祖村にある湯川酒造で製造されている。自治体間交流という近代的な文脈の背後に、中山道にある木祖村にはどのような多層的な社会関係が存在してきたのか。そして、それをもとにどのような交易がなされていたのか。地域社会の超域的な関係性を理解するための端緒を見出したい。また、縮小していく地域社会を捉える学際的な理論枠組みとして、「ムラの尊厳」を、そこにいる人に付随するものではなく、「場所」そのものに宿るものとして捉えることによって検討する。

2. 研究方法等 (300 字程度で記述)

本研究では、質的調査を中心とした地域調査の手法、史誌や歴史書による史実の整理と解釈、歴史的な文化施設の社会的意味の再構築を試みる。平成 26 年度は、質的調査の対象を、住民・郷土史家・まちづくり NPO、伝統産業従事者とし、超域的な地域社会の関係性を理解するための視点として、「ムラの尊厳」の核となる「場所のアイデンティティ」形成がどのようになされるかを中心的に検討した。そして、歴史的な社会的ネットワークがどのように形成され、近代化の過程で「土着知」がどのように再構築されてきたかに焦点をあて、さらには、その社会的ネットワークをどのようにシステム化（制度化）することが可能なのか理論的枠組みの検討をおこなった。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

現象学的概念でもある「場所のアイデンティティ」(E.レルフ)にとっては、「物質的要素」、「人間活動」、「意味」がどのように相互に関連しているかが重要となる。

木祖村における「場所のアイデンティティ」は、木曾の森林、木曾川、味噌川ダムを単なる自治体間協定に基づく行政システム上の管理の対象として意味づけることも可能である。あるいは、尾張藩直轄により守られた森として歴史的な意味を付与したり、水源の天然林という自然景観に希少性を見出すことも可能である。そして、森づくりの一連の活動は、巨大な生態系として村を包み込んでいる「森」や命の源である「川」の恵みに寄り添い、持続可能性までを視野に入れた取組みもある。これらの相互関連がまさに木祖村の「場所のアイデンティティ」であり、地域住民が自らの暮らしている「森」や「川」という「場所」を再認識し、暮らしから切り離されがちな「場所」を暮らしに取り戻していく契機を提供している。

また、祭りでは、神社、天狗、御神輿、獅子屋台、獅子頭、酒、寄け合い、神楽などを歴史的な文脈にあてはめ、五穀豊穰、無病息災、子孫繁栄といった意味が与えられているとともに、祭りの期日変更という判断では、祭りの伝統性が問い直されている。その過程で、「変わるものと変えてはいけないもの」を見出していく。それが「祭りの本質」であり「場所のアイデンティティ」でもある。伝統性や歴史性がとわれる行為は、「変わるものと変えてはいけないもの」を自省することによって、「場所のアイデンティティ」を構築していくのである。木祖村におけるお六櫛の製造や、日本酒の製造は、新しい技術の導入や新しい担い手の登場によってまさにその伝統性が問われている。地場の工芸品、地酒は、「場所のアイデンティティ」の構成要素となっている。

4. キーワード (本研究のキーワードを1以上8以内で記載)

①地域社会	②社会的ネットワーク	③場所	④
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

谷口功・杉藤重信・宮下十有、2015「歴史的な広域ネットワーク形成過程と地域アイデンティティに関する研究序説：山・川・街道による多層的な社会関係：木祖村の場合」、『人間関係学研究』、椋山女学園大学人間関係学部、第13号